

ティーチング・ステートメント

所属 横浜商科大学 観光マネジメント学科

名前 武田修美

作成日 2026.3.12

【責任】

横浜商科大学観光マネジメント学科の特任教授として、「観光地のブランディング」「コミュニティデザイン」「イベントビジネス／サービスデザイン」「地域と観光（1年次必修）」「観光まちづくり（選択）」の5科目を担当しています。また民間企業（株式会社MGNET）の経営者として、新潟・燕三条地域を中心とした製造業のブランディング・プロモーション実務に従事しており、実務者と教育者の両側面を持つ立場から授業を担っています。

【理念】

私が教育を通じて目指すのは、自らの行いに当事者意識を持ち、あらゆる出来事に「なぜ」と問いを立て、自ら選択と行動を続けられる**自律的な人間（行為者／アクター）**を輩出することです。

この理念は、私自身の学生時代の経験に根ざしています。当時の私は優等生ではありませんでしたが、「お前らの気持ちはわかる、だがなぜダメかを考えろ」と真剣に向き合ってくれた教員の存在が、自分を変えるきっかけになりました。その経験から、教育とは知識を与えること以上に、目の前の出来事を自分事として向き合い、問いを立てる姿勢を育てることだと確信しています。

そしてこの考えは、私が専門とする観光学の本質とも直結しています。観光とは、よそ者の目で当たり前を疑い、埋もれた価値を発見する、言わば学ぶ行為です。地元の人ほど見過ごしてしまいがちな風景や生活が、外から来た人の目には新鮮な価値として映る、この「見方を変えられる力」こそが、観光学を学ぶ上での核心です。

日常を俯瞰する目を持つことで、自分の身近にある小さな幸せや価値に気づけるようになります。それは進路選択や人間関係など、学生生活のあらゆる場面で生きる力になると信じています。

【方針・方法】

上記の理念を実現するために、4つの方針を軸に授業を設計しています。それぞれの方針に対して、オンライン授業という環境を活かした具体的な方法を組み合わせています。

①「なぜ」を問う習慣を授業に埋め込む

- 共感が生まれる話題提供を心がけ、共通認識の中にある小さな違いに気づく場面をつくる

- 注意喚起や課題説明の場面で必ず「なぜそうなのか」の理由を繰り返し伝える
- 定量的な根拠を示し、学生自身が「なぜその目標・到達地点なのか」を考えるきっかけをつくる
- 定期的な小テストで授業内容を「無駄なこと」と思わせない機会をつくる
- DM 機能でメモの共有により、考え工夫する意識を醸成する

②教育は教わる側にウェイトがある

- カメラオフ・音声オフを許容し、心理的負荷を下げる
- リアクション機能を使う機会を意図的に作り、小さく参加する方法に気づかせる
- 前向きに授業を受けている学生はいないという前提に立ち、小さな成長にも目を配る

③学生が主体的に取り組める環境をつくる

- 授業冒頭と終わりに学生持ち込み企画の時間を設ける
- 冒頭は余談からスタートし授業への入口を柔らかくする
- チャット機能を活用したアイスブレイクや簡易ディスカッションで発言のハードルを下げる
- 100分集中は大人でも難しいため、集中する箇所とリラックスできる箇所を設ける

④教員自身を知ってもらうことを重視する

- 自己開示の時間を意図的に多くとり、実務者としての経験や「なぜ地元を愛すのか」などを、武勇伝や昔話にならないよう、受け手目線で話す
- オンライン講義は **Face to Face** の距離感が近いいため、カメラの距離感を工夫し、画面越しでも適切な親近感を演出する

【成果・評価】

- 授業アンケートでは各項目 **80%**以上の高い満足度を継続的に得ている
- オンライン授業の特性を活かしたストレスレスな授業運営が好評を得ている（リピーター履修比率が **60%**程度）
- 毎年数名の学生が自発的に私の地元・燕三条を訪れている（述べ **8**名程度）
- 各授業ごとに学生から個別の進路相談が届いている（述べ **20**人程度）

【目標】

短期的には、1年間を通して、授業を履修した全ての学生に、日常や地域を「なぜ」と問い直す小さなきっかけが生まれている状態を目指します。人は簡単には変わりません。だからこそ、一人ひとりに小さな芽吹きを届けることを短期の目標として据えています。

長期的には、授業で育てた学生が卒業後も自律的に問いを立て続けている状態をつくることを目指します。そのために私自身が教育と実務の往還を体現し続け、学生にとってのロールモデルであり続けます。